

二〇二四年度・学力考查問題【国語】

(中学第一回)

注 意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は13ページで□・○・△の三題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に数えます。



線あゝおのひらがなを漢字に直しなさい。

- 1 カイコをたくさん飼ってようさん業を営む。
- 2 冬はせいざの観察に適している。
- 3 電車のうんちんを扱う。
- 4 大勢の前で詩をろうどくする。
- 5 新しい法律の案についてかくぎ決定する。



次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

十月の日曜日の昼近く、「るり子（るり姉）」は、姉の三人の子どもたち（八歳の「さつき」、七歳の「みやこ」、四歳の「みのり」）にせがまれ、家の裏手にある、海までさほど遠くない川に向かうことになった。もともと子どもは苦手だとは思いつながらも、この三人と関わることは別だと、近ごろ「るり子」は感じるようになって来ている。五分ほど歩いて、幅八メートルほどの川が流れる川べりの道に出た。

るり子は昔から、川が海につながっているということが不思議でなかった。大人になった今でも、ちよつと妙に思う。川と海は違うものなのに、それがつながっているなんておかしいものだ、と。

「あの鯉、金色じゃん」

「あつ、あつちにはオレンジのがいるよー」

さつきとみやこはきんきん騒いで、フェンスの網目模様がつきそうなくらいに、からだを押し付けている。

「ねえねえ、鯉じゃない魚がいるよ、るり姉。見て見てあそこ」

みのりがそう言って、横に立っているるり子のふくらはぎに手を置いた。みのりの手はとても冷たくて、ちよつと湿っていて、るり子のふくらはぎの湾曲部にピタッとくっついた。

「どいどこ？ ああ本当だ。なんていう魚だろうね」

「みのちゃん、あの魚にえさあげたい」

るり子は、みのりの腋の下に手を入れて持ち上げ、フェンスの先が届くように抱え直した。子ども独特の匂いがした。牛乳と汗と太陽の匂いだ。

「はい、じゃあ、あの魚のところまでほうつてみて」

みのりが力いっぱいパンの耳を投げる。

「あつ」

みのりが投げたえさは、すぐに鯉に見つかって、あつという間に食べられてしまった。

「鯉さん、食べないですよ」

みのりが腕を伸ばして、また思いきりほうる。黒色の鯉がすばやく寄ってきて、大きな口で勢いよくえさを食べてしまう。しかしみのりは、懲りずに何度も繰り返し返す。抱きかかえてる腕がすらくなくなってきた。みのりはるり子の腕のなかで、元氣よく反り返って川に身をのり出す。「はい、おしまい」

るり子はみのりを下ろして、腕をぐるぐると回した。みのりが不服そうにるり子を見る。

もしあのままこの子を抱えてて、急に力が抜けて、ふいに川に落ちてしまったらどうなっていたら。るり子は、鯉たちが威勢よくぶつかり合っている川を覗いた。浅いから大怪我するに違いない。もしくは……。I と身震いし、怖い妄想を頭から追い出す。るり子は息を吐き出して、またしやがみこんでフェンスの間からえさを投じている、みのりのつやつやとした髪をなでた。

子どもの頃、よくこの道を通って海まで行った。そしてそのときも、

川と海の境がよくわからなかったんだということを、るり子は思い出していた。淡水と海水の境目。川と海の境目。るり子はそのことについて考えてみた。境目について。この川のどの部分が境かということについて。

「あ、すずめ！」

みやこが大きな声を出した。

川に投げ入れるときに細かいパンくずが落ちたのか、数羽のすずめがいつの間にか寄ってきていた。

「あたし、鯉じゃなくて、すずめさんにえさあげようつと」

みやこが川に背を向けて、道にパンを撒き始めた。とたんにすずめが十羽くらい集まってきた。チュンチュンというすずめの声をきいて、さつきもみのりも川に背を向けた。鯉は変わらず貪欲に口を開けている。

昔、この川に何度かお父さんとお姉ちゃんと釣りに来た。もう少し先の、橋のところにポイントがあつて、あるときなんてバケツいっぱいに鮎だか鮎だかが釣れた。あときは自分も竿を持たせてもらって、かなり釣った記憶がある。

浮きがくつと沈むあの感じ。くいつと手首が下がるあの瞬間。ものすごく得したようなあの気分。自分という人間は、もしかすると案外いい線いってるんじゃないかって、はじめて思えた瞬間だった。あのあと、バケツいっぱい魚をどうしたんだっけ。うちに持って帰ったんだっけ。

「ちよつと！」

突然の金切り声に、るり子は驚いて振り向いた。

「なにやってるのよ！」

子どもたちは **Ⅱ** として手を止めた。

「ここにえさを撒かないでちょうだい！」

「はあ……」

「迷惑してるのよ。うちの前が鳥の糞だらけになっちゃうのよ！」

「あつ、そうですか。すみません」

るり子は、背後の家から出てきたであろう、年配の女に頭を下げ、子どもたちに目で合図した。

「どうもすみませんでした。気を付けます」

るり子はもう一度 **Ⅲ** と頭を下げた。子どもたちはつまらなそうに、また鯉に向かってえさを投げ始めた。

「まったく、困るのよね」

るり子は申し訳なさそうな顔をつくって軽く会釈してから、ゆつくと女に背を向け、川のほうに向き直った。

「本当に困るわ」

みりのりがしゃがんだまま、きき耳を立てているのがわかる。

「あなたが掃除してくれるならいいのよ。それだったら、いくらでもえさを撒いてかまわないわよ」

みやこがにわかには振り返って、るり子の母、つまりみやこにとっての祖母よりはるか年上である女を見つめる。

「糞を掃除するの大変なのよ。あなた、鳥の糞を掃除したことある？」

るり子はなんとなく首をかしげてみせる。ちよっとしつこいなと思う。道端には、もうほんの少しのパンくずさえ落ちていない。そんなのぜんぶ、さっきのすずめたちが食べてしまった。

「迷惑なのよ。いい加減にしてちょうだい」

こういう場合どうしたらいいんだろう。子どもたちがいなくなったら言い返してやるところだけど、もう一度ここで謝ったほうがいいのか。でもひたすら謝るっていうのも、子どもたちの教育っていうか、気持ちに、よくない影響を与えそうな気がする。だって、ここまでうるさく言われるほど、悪いことはしてないはずだ。

るり子は、女の顔を **Ⅳ** と見た。あと一言でもなにか言ってきたら、きちんと筋の通った話をしようと決めた。

老年期後期にさしかかろうとしている女は、るり子を見ていたけど、その目はどこも見えていないし、なにも見えていないような感じだった。女は、「気を付けてちょうだいよ！」と、日頃あまり耳にしないような声の調子で言って、そのまま新築であろう家のなかに入ってしまった。三人の娘たちのちいさな手は、その間じゅう止まっていた。

なんだかひどいことになってしまった。こういうことって、子どもは一生忘れないものだ。るり子は、無性に腹が立つてきた。

みやこがるり子のスカートを引っ張って、にっと白い歯を見せた。そして、遠くでちよこちよここと歩いている一羽のすずめに向かってパンの耳を投げた。何羽かのすずめがすばやくえさに寄ってきた。

るり子はおどけて微笑みながら、シツ、とすずめを追い払い、子どもたちに向かって、はつきりとした大きな声で言った。言う前に深く息を吸った。

「ここにえさを撒いちゃいけないんだって。すずめが糞をするんだって。そのお掃除がとっても大変なんだって。だから、もう道にはえさを撒かないでね。鯉さんたちにえさをあげようね」

るり子の声で、みのりの緊張がようやく解けたのがわかった。さつきは、さつきより少し乱暴気味に、鯉がほとんどいない場所を狙ってパンを投げた。みやこは、「あたし、鳥のほうが好きなんだけど」と言いながら、つまらなそうに川にえさをほうった。

るり子はうしろを振り返って、先ほどの女の家を眺める。どこかの窓からずっと見ていたに違いない。今も監視してるに決まってる。庭には、しゃれたプランターやら鉢やらがいくつもあって、色とりどりの花が咲き乱れている。そのなかに、陶器でできたリスや七人の小人の置物が、見事に配置されている。

るり子は大げさに頭をふって、世界中の人にきこえるようなため息をついた。それから、フェンスにびたりとからだを寄せて、川を覗きこんだ。ちょっと先のほうに、みのりが言った小さな魚がたくさん見える。川の風景だ、と思った。

そしてそのとき、ふと思ひ出した。そうだ、昔、ここにカニがいたんだ。今みたいにフェンス越しに川を覗いていたら、石の横に大きなカニの姿が見えた。この距離から見えたんだから、かなり大きかったはずだ。

お父さんに教えたらお父さんも興奮して、わたしに「欲しいか？」ってきいた。わたしにそうきくときは、たいてい自分がのり気なときだった。父親は無謀にも、この緑のフェンスをのり越えて土手を降りた。そしてズボンをまくり上げて、慎重に川に入ってしまった。わたしは、父に気をとられてカニを見てなかった。だってそりゃさうよ。フェンスをのり越えて、川に降りる人なんてまずいないんだから。

お父さんは川底を注意深く見ながら、カニを探していた。それから

顔をあげて、わたしに「どこだ」ってきいた。わたしは慌てて一生懸命にカニを探した。だけどそんなの、もうどこにもいなかった。人間の気配を感じて、とっくにどこかに逃げたのだ。考えたら当たり前だ。川に何年も棲んでいるカニを、素手で捕ろうなんてほうが間違ってる。しばらくして戻ってきた父は、「惜しかったな」と言った。途中なかで切ったらしく、すねから血が出ていた。

るり子は、目を凝らしてカニを探してみた。でももちろんいなかった。あの当方でさえ、カニなんてすぐくめずらしかった。

「おじいちゃんのこと覚えてる？」

るり子は、さつきにきいてみた。

「うん、ちょっとだけ覚えてる」

横からみやこが「あたし、あんまし覚えてなあい」と勝ち誇ったように言う。父が肺がんで死んだのは三年前だ。るり子は、川と海の境

のことを考えていた。川が海に流れつくことをぼんやりと思っていた。

「海は大きな水たまりなんだ」

と、父は教えてくれた。父はいつも正しかった。

今、るり子ははじめて、男に生まれたかった、と強く思った。そうしたら、わたしはお父さんの息子になれたし、誰かの父親になれたはずだった。そして、すずめたちに景気よくえさを撒けたかもしれない。

四人で広がって手をつなぐ帰り道、さつきが「二百四十グラムに六十グラム足せば、三百グラムになるよね」と言った。

(椰月美智子『るり姉』所収「川」双葉社より)

問一 I Ⅳに入る言葉として最も適当なものを次の中から

それぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号を二度使
てはいけません。)

ア きちっ イ じっ ウ びくっ

エ ずっ オ ぞくっ

問二 線 a 「かなき金切り声」・ b 「にわかに」とありますが、本文

における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、
記号で答えなさい。

a 金切り声

ア 金属がつぶれるような耳障りみみさわな声

イ 張りつめて余裕を失った声

ウ 助けを求めるようなふりしぼる声

エ 高く張り上げた鋭い声

b にわかに

ア いきなり

イ ゆっくり

ウ しつかり

エ はっきり

問三 線 1 「息を吐き出して」・ 4 「言う前に深く息を吸った」

とありますが、こうした「息」に関する描写を通して読み取れる
それぞれの「るり子」の様子の説明として最も適当なものを次の
中から選び、記号で答えなさい。

ア 1は、日頃ひごろから自分に自信が持てず、今も恐ろしい考えを

抱いたことに深く落ち込んでいるのに対し、4は、見張り続
けている年配の女性を納得させる言い方を、内心不安になり
ながらも探り出そうとしている様子。

イ 1は、子どもたちと接するのはやはり不慣れであることを
実感し、嘆いているのに対し、4は、こんなにも自分たちの
心に負担をかけた年配の女性への当てつけに、いやみな言葉
を聞かせてやろうと勢い込んでいる様子。

ウ 1は、今自分だけが守ることのできる幼い命の存在を改め
て実感し、自らを落着かせようとしているのに対し、4は、
子どもたちの意識を完全に切り替えさせるために、可能な限
り冷静になろうとしている様子。

エ 1は、子どもの重みに耐え切れず一方的に下ろした自分を
うまくごまかそうとしているのに対し、4は、極度の緊張か
ら逃れて自分を取り戻すべく、子どもことばを巧みに使って
彼らの仲間に入り込もうとしている様子。

問四 —— 線2 「ゆっくりと女に――向き直った」とありますが、

「るり子」のこの様子の説明として適当でないものを次の中から

一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が冷静であることを、子どもたちに感じ取ってもらいたいと考えている。

イ 年配の女性からさらに厳しく叱られるに違いないと、内心では緊張している。

ウ 失礼のない謝り方をしたので、この件についてはもう十分だろうと思っている。

エ 子どもたちの意識を、年配の女性から別な方へ向かわせようとしている。

問五 —— 線3 「るり子は、無性に腹が立ってきた」とありますが、

その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア こうした経験が子どもたちに悪い影響を及ぼすことへの心配以上に、結局は言い負かされてしまった自分の無力さを認めるしかなかったから。

イ 自分の表情も見ずに話し続ける相手に不気味さを感じた以上に、子どもの無邪気さが奪われてしまったことへの取り返しのないなさに気づいたから。

ウ 整った住まいに似合わず汚い言葉を使ったことだけでなく、そのことによって子ども手の動きまでも封じてしまった女性に対する強い反感を覚えたから。

エ この件が子どもたちの心に傷を残してしまいかねないこと

への強い反発と、一方では迷いが生じて女性にうまく対応し切れなかった自分への悔しさもあったから。

問六 —— 線5 「るり子は大げさに――川を覗きこんだ」とありま

すが、その理由について、わかりやすく説明しなさい。

問七 —— 線 A 「川と海は違うもの」おかしなものだ、と」・ B

「川と海の境」境かということについて」・ C 「るり子は、川と海の境」ぼんやりと思っていた」とありますが、これらの表現から読み取れることとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 川と海とはそれぞれ別のもの、境目もはっきりあるところでは理解していたものの、今では、川も海も境目のない同じものだということができて、海の懐の深さと雄大さを感じつつ、新たな魅力に心地よく浸っている。

イ 川と海とはやがて一つにつながると幼いころに教わったことをなんとなく思い返し、この川べりに生きていた人々も、亡くなるとその魂は別世界としての海に流れ着いて一つになってゆくに違いないと、しみじみと感じ入っている。

ウ 境目を越えて川は海とつながるが、動き続ける川と動かない海とが一つになるその不思議さを覚えるにつけ、日常の様々な経験が今の自分につながっていることを思い、川が海に流れつくと言った父の言葉の意味を感じ始めている。

エ 川はやがて海に流れつくことで境目が消えて一つになるとの教えを思い出したことで、この世とあの世の境目を飛び越して、自分も亡き人の心とつながることができたと確信し、励まされ強くなれるような気持ちになっている。

問八 —— 線 B 「父はいつも正しかった」とありますが、そのよう

に振り返る「るり子」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 今日のように我慢を強いられるのはまだ大人になりきれないからだとは思いたくないけれども、父のような自由な行動が許されるのは大人の特権なのかと少し皮肉に思っている自分を見出し、複雑な思いを抱いている。

イ フェンスを乗り越えて向こう側に降り立つことまでした父の大胆さを思うにつけ、自分にはそういうことはできないだろうと思う一方で、そうした存在感の大きな父になお憧れている自分に改めて気づいている。

ウ 今日の悔しさは忘れられそうにないので、これまで自分の競争相手だった父の包容力の大きさを認め、これからの自分の人生において、事あるごとに父を手本として自信を持って生きていこうと、固く誓っている。

エ 年配の女性に反論できなかった情けなさを反省し、父の決断力には決して及ばないながらも、父がフェンスを越えたことを見習って自分も行動力を発揮し、周囲に認めさせながら生きてゆきたいものだと、気持ちを新たにしている。

問九 —— 線7「四人で広がって」と言った」とありますが、こ

れについて述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 年配の女性にしつこく注意されて何やら落ち込んでしまった表情の「るり姉」を察して、「さつき」が子どもの中の年長者として他の話題を探して元気づけようと、精一杯気を遣っている様子が感じられる描写である。

イ 自分の世界に入り込んでしまった様子の「るり姉」を何とか励まそうと、泣きたいのをこらえて算数の話題を振る「さつき」の健気さが伝わるという、血縁者同士の思いやりが際立つ、美談としての結末である。

ウ 知らない大人に叱られたことを忘れようとして算数に没頭する子どもたちのしたたかさと、それに適切に応えるであろう「るり子」の気持ちの切り替えが予想されるという、読者の想像をかき立てる工夫がなされている。

エ 子どもたちからは、自分たちのいつもの調子を取り戻して家路につく様子が感じられる一方で、今日の出来事を通して「るり子」の変化に読者の意識が向けられるという、余韻が残る終わり方である。



次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

現在、世界のオノマトペを大まかに捉える定義としては、オランダの言語学者マーク・ディングemanseによる以下の定義が広く受け入れられている。

オノマトペ…感覚イメージを写し取る、特徴的な形式を持ち、新たに作り出せる語

かなり抽象的な定義である。「特徴的な形式を持つ」という点は、オノマトペに重複形が多いことから納得できそうである。「新たに作り出せる」という点も、「ジュージャー」のような例から明らかだろうでは、「感覚イメージ」を「写し取る」とはどのようなことを意味するのだろうか？

まず、オノマトペは感覚を表すことばかどうかを考えよう。一般に、「感覚を表す」ことばとして真つ先に挙げられるのは形容詞である。日本語の形容動詞も含む。「うるさい」「静かな」「甲高い」は聴覚、「大きい」「鮮やかな」「赤い」は視覚、「滑らかな」「重い」は触覚、「酸っぱい」「甘い」「しょっぱい」は味覚、「くさい」「芳ばしい」は嗅覚といった具合に、形容詞の多くは感覚特徴を表す。

一方で、感覚と強く関わる動詞というと、「聞く」「見る」「感じる」「味わう」「嗅ぐ」あたりである。名詞なら、「音」「外見」「手触り」「味」

「匂い」などであろうか。「走る」「食べる」「吠える」「知る」などの動詞は、五感のどれに関わるかというよりも、どんな出来事を軸にしたことばである。「ネコ」「空気」「夢」「昨日」などの名詞も、どの感覚のことばかというよりは、対象がどんなものかに関心を持つことばである。

では、オノマトペはどうだろうか？ いわゆる擬音語は、「ニャー」「パリーン」「カチャカチャ」のように聴覚情報を中心に表す。擬態語の中には、「ザラザラ」「ヌルッ」「チクリ」のように触覚情報を表していると思えるものもあれば、「スラリ」「ウネウネ」「ピョン」のように視覚情報に注目しているものもある。さらに、擬情語と呼ばれるオノマトペは、「ゾクッ」「ドキドキ」「ガツカリ」のように第六感ともいべき身体感覚や心的経験を表す。

多くの形容詞と同様、オノマトペは感覚のことばなのである。このことは、感覚的でない意味を表すオノマトペが想像がたいことからわかる。たとえば、「正義」「愛」「迷惑」といった名詞は特定の感覚によらない意味を表す。一方、これらの意味を表すオノマトペといえるのは、日本語でも他言語でもなかなか見つからない。これらの概念は、音で真似るには抽象的すぎるのであろう。形容詞ならば、「正しい」「愛おしい」「迷惑な」のような語でこれらの概念を表すことができる。その意味で、オノマトペは形容詞よりもさらに感覚を中心に据えたことばと言えるかもしれない。

先の定義によると、オノマトペは感覚イメージを「写し取る」ことばだという。しかし、ことばで「写し取る」とはどういうことなのだ

だろうか？ このことを考える糸口として、オノマトペが万国共通に理解されるものなのかという問題から始めたい。写真やコピー機のようにイメージを写し取ってことばにするのなら、どの言語のオノマトペでも似通っているのではないだろうか。もしそうなら、知らない言語のオノマトペでも、意味がある程度予想できそうである。

次の五つの問題に答えてみてほしい。いずれも外国語のオノマトペに関する問題である。

- ① インドネシアのカンベラ語で「ンプトゥ」は物体が移動した際に立っている音を表す。どんな物体のどのような方向の移動だろうか？
- ② 南米のバスタサ・ケチュア語で「リン」は物体を移動させる様子を表す。どんな場所にどんなふうに移動させる様子だろうか？
- ③ 中央アフリカのバヤ語で「ゲンゲレンゲ」はひとの身体的特徴を表す。どんな特徴だろうか？
- ④ 南アフリカのツワナ語で「ニエデイ」は物体の視覚的な様子を表す。どんな様子だろうか？
- ⑤ 韓国語で「オジルオジル」はある症状を表す。どんな症状だろうか？

答えは以下のとおり。①「ンプトゥ」は **A**、②「リン」は **B**、③「ゲンゲレンゲ」は **C**、④「ニエデイ」は **D**、⑤「オジルオジル」は **E**。日本語ならそれぞれ、①「ポトツ／ドサツ」、②「スツ」、③「ゲツソリ」、④「キラキラ」、⑤「クラクラ」あたりが対応しそうである。とはいえ、②については、「スツ」は差し込む動きに限らないため、日本語は「リン」にちょうど対応するオノマト

ペがないということになろう。さて、読者のみなさんは何問正解できたろうか。

一般に、オノマトペはその言語の母語話者にはしっくりくる。まさに感覚経験を写し取っているように感じられる。ところが、非母語話者には必ずしもわかりやすいとは限らない。実際、日本語のオノマトペは、外国人留学生が日本語を学ぶ際の頭痛のタネになっている。「髪の毛のサラサラとツルツルはどう違うの？全然わからない！」と彼らは言う。

感覚を写し取っているはずなのに、なぜ非母語話者には理解が難しいのか。「感覚を写し取る」³というのはそもそもどういうことなのか。

この問題は、オノマトペの性質を理解する上でとても重要である。同時にこれは、オノマトペの問題にとどまらず、アートをはじめとしたすべての表現媒体において問われる深い問いなのである。

オノマトペが感覚イメージを写し取ることについて、もう少し深く考えてみよう。対象を写し取るものとしてもっとも直接的で写実的なのは動画や写真だろう。しかし「感覚」は、外界にあるものではなく、表現者に内在するものである。

⁴ 絵画はどうだろう。写真ほど忠実ではないが、やはり対象を写し取っていると言つてよいだろう。しかし、絵画で大事なのは、表現者の「感覚の表現」であり、多かれ少なかれ絵画の中に見えるものは、表現者の「主観的感覚」である。したがって絵画は、その抽象度において大きな差が生まれる。非常に細密に対象を切り取った具象的な絵画は、その対象が誰にでもよくわかる（もちろん、それだけではアートにはならず、どんなに具体的に描かれた対象でも、そこに表現者の「感覚」

が表現されてはじめて「アート」であると言える）。他方、抽象絵画は表現者の内的な感覚の表現に重点が置かれ、特定の対象が同定できないこともよくある。

オノマトペは絵画のように「感覚イメージを写し取る」のであろうか？ オノマトペは、少なくとも当該言語の母語話者はそれぞれ意味を直感的に共有できるので、絵画でいうと、具体的な対象が同定できない抽象絵画よりは、具象絵画に近いだろう。ただし、絵画は原則、鑑賞者の使う言語や文化に関係なく受け止められることを前提としているが、オノマトペは特定の言語の枠組みの中で理解される。

⁵ アイコンはどうだろうか？ そう、コンピュータ画面でアプリやゴミ箱を示したり、街中でトイレや交番などの場所を示したり、メールやSNSなどのデジタルコミュニケーションで感情を伝えたりするための、アレである。

アイコンは、アート性よりは、わかりやすさを重視した記号と言つてよいだろう。ちなみに「アイコン」の語源はギリシア語の「エイコン eikon」（ラテン語では「アイコン icon」）で、〈偶像、崇拜の対象となる像、象徴〉というような意味を持つ。「感覚イメージを写し取る」という観点からアイコンが興味深いのは、かなり抽象化しているのに、対象がわかりやすい点である。「☺」「>>」のような絵文字・顔文字（emoticon）も、かなりデフォルメされているにもかかわらず、笑顔であることが一目瞭然である。

実は、オノマトペが注目されている大きな理由は、まさにこの「アイコン性 iconicity」にある。アメリカの哲学者チャールズ・サンダー

ス・パースは、「アイコン」ということばを「性質から対象を指示する記号」という特別な意味で用いた。噛み砕くと、「表すものと表されるものの間に類似性のある記号」のことである。絵や絵文字は、それらを構成する点や線の組み合わせが対象物に似ているので、パースの意味でも「アイコン」である。ジェスチャーの多くもアイコンである。ステーキを食べるジェスチャーは、実際にナイフとフォークを持つていなくとも、ステーキを食べる動作に似ている。

この定義によれば、オノマトペはまさに「アイコン」である。表すもの（音形）と表されるもの（感覚イメージ）に類似性があると感じられる。日本語の母語話者であれば、「ニャー」というオノマトペはネコの声に似ていると感じる。音以外を表すオノマトペであっても、たとえば「ピカピカ」という音連続と明るい点滅は似ている気がするし、「ぶらり」という音形も気軽なお出かけにいかにも似合っているように感じられる。しかし、よくよく考えてみると、この「似ている」という感覚は、それ自体どこか曖昧で興味深い存在である。いずれにしても、音形が感覚にアイコン的につながっているという点で、オノマトペは「身体的」である。

（今井むつみ・秋田喜美『言語の本質』中央公論新社より）

※1 母語話者：「母語」は「幼いころに習得する言語」、「母語話者」は「母語を話す人全体」を指す。

※2 媒体：メディアのこと。

問一——線 a・b について、後の問いに答えなさい。

a 「しっくり」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 気持がよいほどはつきり筋道が通っているさま。

イ 違和感がなくなにも感じないさま。

ウ 慣れ親しんでいて落ち着くさま。

エ 曖昧で不快に思うさま。

b 「具象的な」と意味が近い言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 写実的な

イ 抽象的な

ウ 主観的な

エ 感覚的な

問二——線 1「オノマトペは」と言えるかもしれないとありますが、筆者がこのように判断する根拠として適当でないものを

次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 形容詞は感覚特徴を表すことが多い。

イ 動詞や名詞に比較して、オノマトペは身体感覚や心的経験と関連するものが少ない。

ウ 感覚的でない意味を表すオノマトペは想像しがたい。

エ 形容詞は「正しい」「愛おしい」「迷惑な」といった語で感覚的でない意味を表せる。

問三 —— 線2「次の五つの問題に答えてみてほしい」について、後の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1)

A
E

に入るものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア きらめく様子
- イ 土、水、火などに差し込む様子
- ウ めまい
- エ 痩せこけた様子
- オ 重いものが落ちた音

(2) この「問題」を通して筆者が言いたかったことは何ですか。四十五字以内で説明しなさい。

問四 —— 線3「『感覚を写し取る』()ということなのか」とありますが、筆者は「感覚」をどのようなものであると定義していますか。文中から二十二字でさがし、はじめの五字を抜き出しなさい。

問五 —— 線4「絵画はどうだろう」について、後の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 「絵画」について説明したものとして適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 絵画において表現者の感覚の表現は、抽象度によって差が生まれる。

イ 具象度の高い絵画は理解されやすいが、抽象度の高い絵画は理解されない場合がある。

ウ 対象を写し取るという点から言えば、写真と同様に、絵画も写実性が重要だと言える。

エ 絵画においては、表現者の主観的感覚がどれだけ表現されているかが重要になる。

(2) 「絵画」と「オノマトペ」の関係性についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 絵画もオノマトペも表現者の主観的感覚を抽象的に写し取ったものであると同時に、その対象を認識できる具象性も兼ね備えている点で共通している。

イ 絵画は基本的に鑑賞者の使用言語や文化的背景に関わらず楽しむことが可能だと考えられるが、オノマトペはその言語が通用する範囲のなかでなければ理解されにくい。

ウ オノマトペがその言語の母語話者にとって直感的に理解できるものであるのと同様に、絵画も作品の文化的背景が共通する鑑賞者にとっては理解しやすいものである。

エ オノマトペは話者の感覚イメージを写し取る意識によって生み出されるが、絵画は表現者と鑑賞者相互の(そご)はたらきかけによって成立する。

問六 ——線5「アイコンはどうだろうか?」とありますが、「アイコン」と「オノマトペ」の関係性についての説明として最も適

当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア アイコンは、わかりやすさを重視した記号であるため万人に通用するものと言えるが、オノマトペは母語話者以外には理解しにくい場合があるため、類似性が少ない。

イ 「表すものと表されるもの」の間に類似性のある記号」というパースの定義に照らし合わせるならば、オノマトペはアイコンとは言えない。

ウ 写実的な音形によって感覚イメージを写し取っているにもかかわらず、母語話者に対して曖昧にしか意味を伝えることができないオノマトペは、「身体的」アイコンと言えない。

エ 対象を写し取っているとは言えない抽象度の高い表現であるにもかかわらず、それが何を表しているのかがわかりやすいという点で、アイコンとオノマトペは似ている。

問七 本文の特徴の説明として適当なものを次の中から二つ選び、そ

れぞれ記号で答えなさい。

ア 読みやすい文体を用いたり、多様なオノマトペを登場させたりすることで、読者にはあまり聞きなじみのないオノマトペへの抵抗感を極力少なくする配慮はいりよをしている。

イ オノマトペという感覚的な言語について、学術用語を用いて考察することで、一見遠く感じられる言語学と日常の言語体験とを結びつけている。

ウ オノマトペの代表的な定義の曖昧さに着目し、具体的な事例を列挙しながら特徴を整理することで、その定義の否定を試みている。

エ オノマトペの定義を共有した上で、その他の言語表現などと比較して共通点や相違点を明らかにしていくことで、徐々にオノマトペの特徴を導き出している。

オ 文章のはじめに持論を提示し、そこから海外のオノマトペの事例を用いたり、新たな問いを立てたりすることで、持論に深さと確かさを与えている。

【国語】

解答用紙 (中学第一回)

受験番号

氏名

得点

一

あ

ようさん

い

せいぎ

う

うんちん

え

ろうどく

お

かくぎ

二

問一

I

II

III

IV

問二

a

b

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

三

問一

a

b

問二

問三

(1)

A

B

C

D

E

問三

(2)

問四

問五

(1)

(2)

問六

問七

・